

## ボーテ著 『ティル・オイレンシュピーゲルの退屈しのぎ話』

1510-11年に出版され、ベストセラーとなった民衆本で、おどけ者の悪戯行脚96話からなる。ヘルマン・ボーテ Hermann Bote (1463-67年生れ、1520-25年没)が、匿名で執筆。賤民身分で障害者だったボーテは、オイレンシュピーゲルと内的な繋がりを感じて、その伝記を創作。古くから流布していた伝承や先行する文芸作品から、多くのエピソードを拾っている。物語の設定は14世紀前半だが、ボーテの生きた15世紀後半の中世末期の世情を色濃く反映している。経済の停滞と頻発する争乱、カトリック教会への批判など近世への過渡期の混乱した世相の中で、機転や言葉遊びで、実在の人物を思わせる高慢な相手の鼻をあかす滑稽話がうけた。聖職者や貴族をも嘲笑するこの書物の人気を恐れた法王は、禁書目録に加えた。大人向けの諷刺笑い話だったが、19世紀になると無難な話が選ばれ子供向けの本に書き換えられた。



1515, 1519年版の挿絵。第61話、パン職人として雇われたオイレンシュピーゲルが、梟と尾長猿の形のパンを焼いている。上着の裾にひらひらした飾りがついている以外、外見や服装はごく普通である。



現在のオイレンシュピーゲルは、子供向けの話にでてくる愉快な道化のイメージ。名前にちなんで、鏡(Spiegel)と梟(Eule)を持っている。鏡…自己愛の象徴、真実を突きつける道具。梟…知恵の象徴と悪霊の使いという両面性を持つ。

## 民衆本に描かれたオイレンシュピーゲル像

中世の伝説上の人物。ボーテの書いた「伝記」では1300年に生まれ1350年に亡くなったことになっている。放浪の旅で、身分を笠に着ている輩、傲慢な者、欲ばり、差別的な者、隙をみせた者たちをやりこめた。

- |                                      |            |
|--------------------------------------|------------|
| すべての階層に入り込み悪戯をするが、特定の階層に受け入れられることを拒否 | … アウトサイダー  |
| 普通なら素直に理解される命令や言動を、わざと曲解して悪戯のきっかけにする | … あまのじゃく   |
| 騙して、ろくでもないものをつかませる                   | … 詐欺師      |
| ありえない場所や食べ物に排泄行為をして、相手を困惑させやりこめる     | … スカトロジー   |
| 綱渡りの特技、逃げ足のはやさ                       | … 軽業師      |
| うけをねらった行動と言動で人気があった                  | … エンターテイナー |
| 醒めた観察眼を持ち、機転をきかせて窮地から脱する             | … 洞察力と悪知恵  |
| 生きるための金をだましとるが、蓄財に興味はない              | … 金の呪縛から自由 |
| ばかにされると、必ず倍かそれ以上にしてやり返す              | … プライド     |
| かれがやりこめた相手は、往々にして評判が悪かった             | … みせしめ     |

## 言葉の意味をすりかえる

手工業親方の言いつけをわざと曲解

職人に仕事を命じて、就寝したり外出したりする親方

親方の目の届かないところで、親方の言葉に「忠実」に仕事に励むオイレンシュピーゲル

第40話 鍛冶屋 「ハッホー、ふいごと一緒についてこい」 „Haho, folg mit den Bälgen nach!“  
Schmied ふいごを持って、小用に行く親方についていった。

第41話 鍛冶屋 「次から次へと鍛えておけ」 „Schmiede eins nach dem anderen, was du hast.“  
仕事場にあった道具類をどんどん溶接した。

第43話 靴屋 「豚飼いが村から家畜を追い出すときのように、大小まじえて皮を断っておけ」  
Schuhmacher „Schneide zu, groß und klein, wie es der Schweinhirt aus dem Dorf treibt.“  
皮を豚、牛、仔牛、羊、ヤギなどのあらゆる家畜の形に裁断した。

第45話 ビール醸造業者 「ホップをしっかりと煮込んでおけ」 „Sieden den Hopfen wohl.“  
Bierbrauer ホップという名の犬を煮た。(作者の地方では犬とホップが似た単語)

第46話 仕立屋 「縫い目が人に見えないように縫うんだ」 „Nähe so, dass man es nicht sieht.“  
Schneider 張り出し窓の下に潜って、人目につかないようにして縫った。

第52話 毛皮匠 「狼の毛皮を仕上げられるか」 „Kannst du auch Wölfe machen?“  
Kürschner 狼の毛皮から、狼の縫いぐるみをたくさん作った。

第54話 皮なめし屋 「薪が足りなくなったとしたら、椅子やベンチを使ったらどうだ」  
Gerber „Wenn ich kein Holz hätte, so hätte ich wohl noch Stühle und Bänke.“  
家中の椅子やベンチを火にくべ、どんどん煮立て、皮を台無しにした。

第62話 パン屋 「灯りはやらないから、月明かりの中で粉をふるえ」  
Bäcker „Ich gebe dir kein Licht. Du sollst im Mondschein beuteln.“  
月の光を浴びながら、中庭に粉を篩い落とした。

## 特定の手職業が（繰り返し）登場する

鍛冶屋 3話 靴屋 3話 ビール醸造 1話 仕立屋 3話 織物師 1話 毛皮匠 4話  
皮なめし屋 1話 袋物師 1話 肉屋 2話 指物師 1話 パン屋 3話

作者のヘルマン・ボーテは徴税書記であり、納税にくる傲慢な手工業親方たちは、市の行政にたいする憤懣をボーテにぶちまけた。親方たちとの日々の葛藤や彼らへの憤りから書かれた話が多いのではないか。1488年、ブラウンシュヴァイク市ではツンフト相互の争いが起こった。市の実権を握った猫というあだ名の毛皮匠をからかう詩を書いたかどで、ボーテは職を失い、禁固刑に処せられた。ウサギの毛皮に縫い込んだ猫を毛皮匠がだまされて買う第55話は、ブラウンシュヴァイク市の毛皮匠を諷刺したもの。

## 排泄物を自在にあやつり、尻をだす

いざというときには、排泄物を利用して相手をやりこめる（ほかの手だてが思いつかぬとき）  
お高くとまっている者が被害に遭うことが多い  
侮辱するときは、尻をだす

第2話 3歳の時、父親の馬に乗せてもらい、裸の尻を見せて村人を侮辱する。

第14話 聖堂世話人をしていた教会の司祭が「教会のど真ん中に排泄できる」と豪語したので、賭をする。司祭の排泄物の場所を計測すると、ど真ん中ではないので賭に勝ち、ビールをもらう。

第35話 自分の糞玉を、予言の木の実と偽り、高額でユダヤ人に売りつける。

第56話 縛り首の処刑前に、ひとつだけ願いをかなえてもらうという約束を市参事会員から取り付ける。その願いは「死刑が執行されたあと、3日間毎朝、訴えた者と死刑執行人が自分の尻にキスして欲しい」というものだった。願いは拒絶され、彼は自由の身になった。

第67話 ハノーファーの公衆浴場の浴場主が、浴場を浄めの館と称しているのので、洗い場の真ん中に排泄し、自分は体の中を浄めたといった。

第69話 宴会を主催するはめになり、炙り肉に尻からバターを垂らす様子を見せて、客を辞退させる。

第93話 死の床で、排泄物の上に金貨をのせた缶を司祭に見せ「控えめに取りならさし上げます」といった。司祭は欲張って、深く指を突っこみ糞まみれになった。

## 魔除けと呪いの言葉

「オイレンシュピーゲル」は、低地ドイツ語で「尻を拭え・なめろ」とも解釈できる。

古代ゲルマン民族は、悪霊と竜に対する魔よけとして尻をむきだしにした。

尻をむきだしにした彫像、舌を出した彫像 … 中世の建造物

尻にキスをする行為は、中世には魔女が悪魔に敬意を表す行為といわれていた。

絞首刑になった者の穢れた死体に触れるなど、想像を絶した不名誉な行為だった。

母親が子供を守るために、「尻をなめろ」と怪しい人にむかって言う慣習は、20世紀になってもあった。

排泄物は、魔よけや薬の材料でもあった。

ルターも悪魔の誘惑を感じたとき、よく排泄物に言及 … 悪魔除けのお守りとしての糞

ドイツ文化の糞便嗜好 … 多くの俗語に含まれる

## <参考文献>

藤代幸一編訳 『司祭アーミス』 1987年 法政大学出版局

関楠生訳 Heinrich Pleticha 『中世への旅 都市と庶民』 1982年 白水社

新井皓士訳 Alan Dundes 『鳥屋の梯子と人生はそも短くて糞まみれ』 1988年 平凡社